



保育士だって親なんだな

前川 良太

あちこちで話しているのでよくご存じの方もいるかもしれませんが、うちの長男はいわゆる発達に凸凹のある子です。小さいころから発語が遅く気持ちの切り替えが苦手、赤ちゃんの時だってわけもなくずっと泣き続けるような子でした。今でも予定の変更には少し戸惑うし、自分の一方的な思い込みでけんかになるし、苦手なことも心配なことも尽きません。だけど根はやさしくて真面目、他の人には思いつかないユニークな発想も彼の持ち味です。そんな息子も今年で保育園生活も終わり、就学が目前に迫っています。支援学級へ入級するかどうかということはずっと検討の中にありました。だけど、少し背伸びしてでも自分の力でしがみついていく体験の方がこの子の育ちにとって必要なのではないかと夫婦で話し合って半ばそう決めていました。そんな中アトム担任たちとの面談では、その見解は大きく食い違っていて、支援学級が良いのではないかと提案を受けたのでした。良くも悪くも取り繕っていいカッコできない彼の特性はアトムでもふんだんに発揮されていて、担任や、のなちゃん（アトム野中園長）、一番手のかかる時期に担任としても支えてくれたよっちゃん（烏野主任）達の話す我が子の姿や「ここが苦手やでな」にはそこまで予想外ということもなく、むしろ「そうやでな」という内容でした。そしてそこを見て支援学級へという提案も「そういう考えもあるよな」と頭では理解できることでした。だけどなぜかふつふつと、沸きあがる感情を抑えきれないことに、自分自身が動揺していました。そこまで分かっている支援学級へと腑に落ちないことに、なぜだかよくわからない自分でした。そして、これまでつばさでいろんな保護者と就学に向けて「そうやんな、わかるわかる」と相談に乗ってきた自分の言葉が、急に薄っぺらく感じたのでした。なんだかこれまでの自分の姿勢が不誠実なように思えてなりませんでした。

少し時間もおいてじっくり自分とも向き合いながら、こんな親心だったんじゃないかなと考えていました。

子ども時代自分自身がなかなか学校に馴染めずにいたのですが、息子の困りそうなことがピッタリそのことと重なっていたのです。親としての自分の体験が、どうにか乗り越えてほしくて過剰に息子を頑張らせようとしていた自分だったのではないかと思います。どうしても我が子のことになると、客観的にも冷静にも見られなくなりますね。思えば親と同じ保育園に通う我が子は、本当の意味で初めて親の手を離れることになります。そんな初めての学校生活が不安な私は、「理解して支えてもらおう」よりも、自分たちで何とかさせねばと気負っていたのかもしれません。

こんな風に少し冷静に考えられるようになったのは、小学校で働くつばさの保護者に話を聞いてもらったことや、同じように支援学級に子どもを通わせた同僚の言葉でした。第三者の客観的な相談に、普段のここでの立場とは逆に自分自身が救われたのです。

その後の我が家ですが、まだこうしようという答えまでにはいきついていません。親としての自分も、相談に乗る役目の自分両方見つめ直しながら悩みたいと思います。園長として、こんなブレブレな姿を見せるのはどうなのかとも思いましたが、こんな風に親としても葛藤する人間が、同じようにどの子のことも悩み考えているのだと知ってほしかったのです。もちろん私だけでなくどの職員だっておんなじです。一人の子のためにと必死で悩んで、よりその子らしくあるためにと悩んできたことは、これまでもこれからも変わりません。子育てしながら親も揺れ、そして育てられるってこういうことなのですかね。

